

芦屋大学論叢 第76号
(令和4年3月24日)抜刷

初等教育における意見文を書く力を高めるために

—芦屋大学における小論文の指導を通して—

笠原清次

初等教育における意見文を書く力を高めるために

－芦屋大学における小論文の指導を通して－

笠原清次
芦屋大学臨床教育学部特任教授

1. はじめに

1・1 論理的文章の記述指導に当たって

高等教育における授業では、自らの思いや考えをまとめて聞き手や読み手に向け表現する機会が工夫され、これが数多く設定されるほど、主体的な学習の場を通じて学生自ら知見を広げ、深めている様子が見られる。授業課題に取り組み、考察したことを学生間で交流したり、まとめてレポート提出したりする日常的な授業から卒業論文制作に至るまで、多様な学習機会を通じて、自らの考えを筋道立てて考察し、論理的に記述する力の育成が図られる必要があることは言うまでもないことである。

大学における私の授業では、授業テーマに係り考察したことを授業の最後に15（10）分間で300（200）字程度にまとめ提出することとしているが、当初感想を羅列して字数を満たすものが目立っていたことから、記述の型（感想の中心を書く→その理由・根拠を書く→補足を書く）を提示することにした。次時に、提出されたものを学生間で共有する際、読み手によく伝わる叙述について関心を高めさせるようにし、次第に考察したことが読み手に伝わる書き方、深い考察に繋がる叙述の仕方について理解され、成果が表れるようになってきた。

芦屋大学は臨床教育学部及び経営教育学部を有しているが、6年前から学校ぐるみで教員採用試験対策講座を設け取り組みを進めてきており、年度によっては、現役合格率が全国平均を上回って、小学校教員、中学校（技術科）教員、特別支援学校教員を輩出することができている。教員採用試験科目に小論文あるいは論作文（以下、小論文という。）を課す自治体が多いことから、本学でも「小論文講座」を設定し、これまで数多くの受験生を指導してきている。

一方、小学校における論理的文章の書き方指導に関する実践報告は数多くなされているが、先行研究では、日常生活を題材にして論理的に書くことの大切さと手順を示したもの（長谷川 2017¹⁾）、小学生が論理的文章を書く際に必要となる基本的事項を、指導経験を通じて明らかにしたもの（光野 2017²⁾）、学習意欲を喚起する課題設定と相手意識を育む相互推敲に関するもの（沼田 2015³⁾）、他者の意見文を参照した意見文作成の優位性を説いたもの（佐藤ほか 2021⁴⁾）など多数見られる。

また、中学生・高校生の論説文指導では、「型」を提示し量的及び質的に充実した意見文作成に取り組んだもの（清道 2010⁵⁾）、マッピングやくまでチャートなどの思考ツールや書画カメラ、共有ソフトを活用して作文指導した効果を検証したもの（吉田 2020⁶⁾）、問題の所在を明確に示し自説の論拠の展開と結論の重要性を説くもの（畑山 2014⁷⁾）など、これも多数みられる。

大学における小論文指導では、大学初年次・2年次の授業科目において、考察したことを記述する際に実践されているものが多い。大学初年次教育科目における、意見文作成指導の実践を通じたアクティブ・ラーニングによる文章表現指導の実証研究（2015 篠崎⁸⁾）、一般教養科目「文学」課題レポート作成指導に表れた効果をまとめたもの（工藤 2010⁹⁾）、大学初年次及び2年次における学術的文章作成力の構造を5つの因子としたもの

(佐渡島 2016¹⁰⁾) などがある。また、自治体ごとに出題される教員採用試験科目の中の小論文記述対策のガイドブック(沖山ほか^{11) 12) 13) 14)}) が刊行されており、指導教員や学生間で一定使用されている。

さらに、小学生に基本となる文章構成を指導することで論理的な文章を書く力を伸ばした実践から、大学生に文章構成を指導し日常生活を題材にして記述する練習が、論理的に思考し小論文を書く力を高めるとしたもの(増田 2019¹⁵⁾) があるが、大学生のキャリア形成を促し、卒業後の進路につなげるために行った小論文指導の経験から、小学校における論理的文章や意見文の指導の在り方を対比しながら考察したものは、本稿が初めてである。

1・2 初等・中等教育における論理的文章の表現指導について

現行小学校学習指導要領¹⁶⁾ では、国語科において論理的に記述する際、先ず自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えることが示されている。「事柄の順序に沿って(第1・2学年)」「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に着目したりして(第3・4学年)」「筋道の通った文章となるように文章の構成や展開を考える(第5・6学年)」となっている。さらに、考えを形成したり記述したりすることについては、「語と語や文と文の続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように(第1・2学年)」「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして(第3・4学年)」「簡単に書いたり詳しく書いたり、事実と感想、意見とを区別して、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する(第5・6学年)」ことが示されている。

上述の第3・4学年における書く内容の中心を明確にすることは、文章の構成を考える際、書こうとしている材料の中から中心に述べたい事を一つに絞ることである。これによって、中心となる事柄とそれにかかわる他の書きたい事柄を明らかにできるので、内容のまとまりを意識することができ、段落づくりにつながる。また、考えとこれを支える理由や事例・エピソードとの関係に留意して文章構成を意図することが重要とされる。本学年において、文章構成は「冒頭部－展開部－終結部」とされているが、各部のつながりを意識して、自分の考えが明確になるよう記述することが重要視される。

第5・6学年における筋道の通った文章は、読み手に分かりやすく伝わるよう伝えたい事を明確にし、首尾一貫した展開となるよう、論の進め方に留意して文章を書くことを意味している。ここでは、「考えと理由や事例」「原因と結果」「疑問と解決」などに留意し、文章を整えて書くことが大切となる。本学年では、序論－本論－結論の文章構成が基本とされているが、それぞれの段落でどのようなことを書くか考え、自分の考えを一貫させることに注意を払えるようにすることが肝要である。さらに、書く目的や意図に応じて詳しく書く、簡潔に書く効果を判断しながら書き表し方を工夫したり、文末表現に注意しながら事実を客観的に書くことで、自分の考えを裏付ける証としたりすることが求められている。

これまで述べてきた国語科における目標を達成させるために、調べたことや事実から自分の考えを書く(第3・4学年)、理由や事例を明確にし筋道を立てて自分の意見を述べる文章を書く(第5・6学年)のために、様々な指導の工夫が求められている。

中学校では、自分の考えを分かりやすく伝えるために、主に適切な根拠を挙げながら説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したり、文章構成や展開を工夫したりするなどして、多様な読み手を説得できるような文章を書くこととされている。また、高等学校では、立場や論点を明確にして、考えが的確に伝わり読み手の理解が得られるよう、根拠の示し方、文章の構成や展開の工夫、文体や語句などの表現の仕方を工夫することとされている。このような目標については、その基礎的基本的な事柄の多くがこれまで述べてきたような、小学校段階で身に付けることと捉えることができよう。

2. 芦屋大学における論理的文章の記述指導

芦屋大学では、長年、教職教育支援センターを核にして教職を目指す学生に対する教員採用試験対策が行われてきていたが、2017年度から時間割に組み込んで行われるようになった。当初、専任教員一名を中心とした講座開設であったが、その後講座ごとに学内教員を中心として担当講師が配置されるようになり、全学的な体制が整えられて現在まで続けられている。¹⁷⁾

小論文の記述指導については、各自自治体の過去問を中心に、「あなたは学級担任として、いじめを未然に防止するために、どのような実践を行いますか。具体的な取り組み内容を2つ挙げ、それぞれの理由にも触れながら500字程度(450字以上550字以下)で述べなさい。(大阪府2016)」「学校と地域が連携し、地域の人材を活用することは、授業の活性化につながります。そこで、子どもの学習意欲を高めるために、授業で、どのように地域の人材を活用したらよいと考えますか。あなたの考えを具体的に述べなさい。(横浜市2018)」や「今、学校教育に求められているもの」の中で、一番重視したいことはなんですか。それを実現するために、あなたはどのように実践をしていきますか。具体的な取り組みを2つあげ論じなさい。(神戸市2019)」など教育原理に関するものや、「社会的責任から教員に求められるコンプライアンスや職業倫理について、あなたの考えを述べなさい。(京都市2017)」など教師論に関するものまで幅広い。

小論文の字数は、500字から1500字、字数無制限まで多様だが、800字とする自治体が多く、この字数程度で自らの考えを論理的に記述することが基本とされている。私が担当する小論文講座(以下、講座という)の指導経験では、自分の考えを800字で筋道立てて記述することができれば、上記の字数制限等に対応することに問題はないことが分かってきている。

講座での小論文指導に当たり、出題文の内容を肯定的に受け止め具体的に書くことや字数など、与えられた条件のなかで自分の考えを読み手(採点者)に納得させることができるよう、筋道立てて書き表したものが小論文であること、自分もつ教員の資質と人間性を読み手に感じ取らせることを目指すことを理解させた上で、基本的な書き方について指導してきた。指導に当たっては、前述の小論文記述対策のガイドブックも参照しながら、「芦屋大学 小論文の手引き」を作成し、学生にとって有益なものとなるよう加筆、修正しながら版を重ねてきた。その内容は下記に述べるが、手引きを通してガイダンスした事柄を、学生が筆記する際に取り入れやすいよう作成したものが表1の早見表である。

小論文の構成とメモの要点、

表1・1【こうしよう(構想)メモ～文づくり】早見表】

①序論…自分が「問題」をどのように受け止めたのかを書き、本論につなぐ。		
メモの要点	文 例	文末・書き出し
背景	○…の結果からも、子どもたちの△△△…を高めることが求められている。 ○近年、学校教育におけるいじめや不登校の数が増加していることが問題となっている。 ○近年、少子化、核家族化の進行等により人間関係が希薄となりいじめに関わるニュースも多く報道される。 ○最近の国際的な調査の結果等から、日本の子どもたちの学力低下が叫ばれている。 など	…ている。 …が求められている。 …をよく聞く。 …される。など
定義	○学力を向上させるには、教師の授業力をアップさせることが重要だと考える。 ○子どもたちの豊かな人間関係は子どもたちのよりよい成長につながる。 ○教師と子どもたちの信頼関係を構築することは、悩みを打ち明けられる雰囲気、又は環境づくりへとつながる。 など	…と考える。 …である。 …でなければならぬ。 …が必要である。 など
観点	○そのための手立てとして、「△△△…」 「□□□…」の二点について、具体的な取り組みに触れながら順に論じる。 ○私は以下に、「△△△…のこと」と「□□□…のこと」について考えを述べる。 ○以下、「△△△…」と「□□□…」の二つの観点から考えを述べたい。 など	そのために… 以下(に)… など

文例とともに書き出しと文末表現の例をあげており、小論文の初期指導では学生が重宝している様子が見受けられた。

次に、小論文では、序論—本論—結論の構成が基本となることを学生と確認したが、表1・1のとおり、序論は自分が問題文をどのように受け止めているかを書いて本論につなげるためのものとし、まずは記述内容を肯定的に捉えて問われていること（キーワード）をつかみながら、書く条件を確かめることとした。序論の内容構成では、①問題文に表されていることにつながる要因と考えられることを押さえ、②出題されている事柄を解決するに当たっての思いや考えを述べ、③問題解決を考えるために、どのような切り口から述べるかを書くことを標準とし、それぞれ、「背景」「定義」「観点」と名付け、800字では、それぞれ一文で良いとした。

序論を記述する際には、出題されている内容に係る知識はある程度は必要なことから、「学力向上」「いじめ等生徒指導上の課題」「学級経営」「最も重視する教師の資質・能力」等関心の高い内容から始め、「人権教育や特別支援教育」等の比較的専門性の高い教育課題、「自立心の伸長」「変化の激しい時代に生きるために必要な力の育成」「現代の教育課題」「GIGA スクール構想」等の抽象的なテーマを対象にし、知識を補充したり全体学習で話し合う時間を設けたりしながら、記述につなげることができるようにした。序論の記述では、背景と定義を受けて「観点」を何にするかがポイントとなることから、本論に繋がる観定の決め方を繰り返し全体学習で演習しながら、筋道立てて記述しやすいよう指導してきた。

そのため、例えば問題文「児童生徒にとって魅力ある教師となるために、どのような研さんを積んでいきたいか。」では、最初に教員として研さんしたい（取り組みたい）事をいくつか挙げさせ、「居心地の良い学級をつくる」「分かりやすい授業ができる」「ほめる、叱るのめりはりをつける」など、グループごとに短い言葉でまとめた観点作りを全体学習で行った。同じように、「子どもたちにとって安全、安心な学校をつくる」「いじめを未然に防ぐ」など比較的関心の高い教育課題を用いて観点作りの練習を行い、本論で述べる問題解決するに当たっての自分の考えや具体的な取り組みについて、論点を絞って記述できるようにした。

次に、小論文の中心部分である本論では、まず序論で定めた観点ごとに、観点についての自分の考えを書き、続いて考えの裏付けとなる事例（エピソード）に繋げ、教員になった時に取り組みたいことへと書き進めることを標準とし、それぞれ「論」「例」「策」と名付けた。小論文では、自分の考えを論理的に述べるものであることは勿論であるが、事実や体験、見聞等考えの根拠となる事柄を挙げることが、考えに説得力をもたせることは学生が実感できるようになってきていた。小論文の指導当初、本論では考えの記述に偏りがちであったが、表1・2のように文末表記の違いにより考えの裏付けとなる事柄を挙げて記述できているかどうか推敲することが有効であった。

表1・2

②本論…「問題」を解決するための自分の考え、取り組みを読み手(採点者)に説明するように書く。

メモの要点	書き出し	文末
「観点」についての自分の考え	○…をするためには、 ○…(の指導)においては、 ○…することで ○…する上で、 など多様に	…である。 …と強く思う。 …べきである。 …と考える。 …でなければならない。 など
「論」の裏付けとなるエピソード	○△△市で教育実習(学校ボランティア)をした際、 ○小学生(中・高校生)の頃、 ○大学で△△△の授業を受けた際、 など多様に	…した。 …だった。 …ということだった。 …を実感した。 など
教員としての具体的な取り組み方	○そのためには、道徳の授業を通じて、 ○分かる授業を展開するためには、… ○子どもひとり一人を理解するために、 ○子どもたちが安心して登校できるように、 など多様に	…していく。 …していきたい。 …に取り組む。 …するよう努力していく。 など

本論では、普段から教職教養、教育時事など「教育に関する問題」に対して見識を広げて自分の考え、取り組みをノートに整理しておく、内容のあるよい本論を書くことができることは、論文を書く度に学生に意識づけられている様子が伺えた。

具体的にみていくと、「教職員、児童生徒が共に信頼し合い、心の通い合う人間関係の醸成を図ることについて具体的に論じなさい。」との出題に当たり、ある学生は、一つの観点を「児童理解を深める」とし、「児童それぞれの悩み、家庭状況などについて教師が深く理解することは、適切な支援や環境づくり、個に寄り添った柔軟な対応を行う上で必要不可欠である。また、・・・」と論じ、続いて教育実習校における教員の姿を紹介した後、「児童ひとり一人について深く理解する為に、教師間での情報交換を欠かさず行っていく。決して教師が一人で抱え込むのではなく、前年度の担任や管理職、学年の先生方に相談したり連携したりしながら学校全体で児童を育てていきたい。また、日頃から保護者との連絡や情報共有を密にして、学校では見せない悩みや小さな心の変化にもいち早く気づけるように取り組む。その他にも、授業での児童のつまずきや定着度を把握し、習熟度に応じた的確な指導や授業づくりへとつなげていきたい。」(原文のまま。以下同じ。)とし、二つ目の観点「児童の一番の味方になる」について同様の構成で論を展開していた。

別の学生によるものであるが、「社会のよき形成者としての自覚と資質を高めることについて具体的に論じなさい。」との出題に当たり、一つの観点を「生徒指導で育てる」とし、「変化の激しい社会を生き抜いていくためには、子どもたちが自ら考え、決定していく力が必要である。」と論じた上で、自身が所属する部活動での主体的な運営の経験を例に挙げた後、「そのために私は、学校行事の決め事などを子どもたちが主体となって行っていけるよう支援していく。日頃から少しずつ、子どもたち全員が発言しやすい環境づくりを心掛け、話し合う時間を設けていく。また、そのためにもコミュニケーション能力を育てることが大切である。教員である私から毎日全員に積極的に声掛けを行っていく。・・・」として、二つ目の観点到に繋いでいた。

最後に、これまで述べてきた自分の考えをまとめ、決意を表すものが結論であるとした。その内容として、問題文のキーワードを使って本論をまとめたり、挙げた観点とは別の観点を入れて考えに広がりを持たせたりしながら、教員として志望する自治体の教育に貢献する気持ちに繋げて終えることとし、表1・3のとおり「まとめ」「決意」と名付けた。

これまでに述べてきた書き方指導を行う際に、重視したことは構想メモづくりである。メモづくりの初期段階では文による字数の多いメモが目立つが、このことは、メモを基にして文章構成や段落、段落相互の関係を意識して書く経験が不足していることからくるものであろう。講座での指導では、語句によるメモを作ることは、加筆、削除したり修正したりしながら文章の構想を考えたメモに仕上げる点で有効であることが分かってきている。このようにして作成した構想メモから文や文章を書くことを繰り返すと、次第に最後まで一気に書き上げるようになる様子が印象的であった。

最後に、定期的に小論文を書くことについて述べる。小論文は、週1回15コマの講座を通じて行ってき

表1・3
③結論…書いてきた自分の考えをまとめ、志望自治体の教育に貢献する決意を書く。

本論のまとめや「第3の観点」を	○何よりここで大切なことは・・・ ○以上のように、・・・することが学力向上を果たす。 ○以上二点のほかに、・・・していくことも平ら説であると考え。 ○以上、△△△・・・と□□□・・・について述べた。このほかに・・・。 など多様に	...である。 ...のはずである。 ...と考える。 ...に違いない。 など
自治体の教育に貢献する決意を	○△△△市の子どもたちが・・・できるよう全力を尽くす覚悟である。 ○□□□県の重点施策である「人間形成の場としての活力ある学校づくり」に貢献できるよう鋭意努力したい。 など多様に	...する覚悟である。 ...に全力を尽くす所存である。 など

ており、前述した者を含め多くの学生たちは、10編以上の小論文を書いている。出題される問題は、近い将来教職に就こうとする際どれも切実な問題であるため、教職者としてどのような考えを持ち、どう取り組むのか具体的に考えるまたとない機会となる。ある学生は、「以前は、取り組みの所でいざ書こうとするとうまく書けないことが結構あったが、似たような課題で面接練習をした時に、周りから評価されたことがきっかけとなって、以前よりもうまく書けるようになった。」などと述懐していたが、自ら課題を設定し納得できるまで取り組む姿勢が生んだ結果が表われたものとみて取れよう。以上、学生が職業的自立に向けて自己実現を図る取り組みを支援する中で、多様な小論文課題に対し質の高いものが幾度も生みだされ、自ら教職に就くための資質を高めていくことができたことは、本講座の成果として特筆される。

3. 小学生への意見文指導の在り方に係る一考察

ここまで講座における小論文指導について述べてきたが、痛感するのは自らの考えを筋道立てて述べる基礎基本の力の大切さである。小学校において、論理的な文章や意見文の作成に係る指導目標が達成できていたのならば、中・高等学校における論理的文章を書く経験を積みながら、例えば前述のような自らのキャリア形成に係って考えを論理的に綴ることは十分可能であると考えられる。この見地に立って、小学校段階での意見文指導のポイントについて以下述べる。

先ず、子どもたちが思いや考えを筋道立てて書くための「型」を知ることができ、これに沿って記述する経験を数多く積むことが必要である。大学における私の授業では、スマートフォンを使用して授業内容についての考察を提出しているが、この取り組みにより自ずと論理的な文章に書き慣れてくる様子が顕著に見られた。ある学生は、「道徳的価値を自覚させるためには、子どもの発言一つ一つを大切にし、これを中心に授業を進めていくことが大切であると考えます。それは、模擬授業の時に△△さんが『〇〇だから、〇〇やと思う。』と発表していましたが、・・・こう思うと言うだけの発表で終わらせるのではなく、なぜそう思ったのか教師が声かけすることが大切であると感じました。なぜ、と言う部分を深く考えていくことで、教材で伝えたい事、道徳的価値により一層子ども達が気付きやすくすることができると思います。そのためには、子ども達の一つ一つの発表を大切にし、教師側も反応する必要があると思いました。」と授業を通して考察したことを記述している。このような叙述が普通の授業を通じて体得できるようになると、次第に深く考察したものも生まれてくるようになった。何よりも、自分の思いや考えたことの中核となるものを明確にして、読み手により分かりやすく伝える文章を書こうとする意識が高まる傾向が見られた。小学生にとって、どのような「型」が適切なのか、幅広く研究実践を積むことが求められているのではないかと。

次に、論理的な文章を書く動機づけである。小学生が筋道だった文章を書くのは、前述のように自身のキャリア形成上不可避な試験に向けて書く場合とは異なる。読み手を決めてその対象に向け、ひとり一人が論理的な文章を書きたくするような機会を作ることは大切だが、年間限られた該当する単元学習の機会だけでは、なかなか力が積み上がらないのが現状である。このことから、毎日の授業においてこそ、短文であっても筋道立てた文章を書く機会を意図的に設けることができるはずで、児童ひとり一人が取り組みやすいものにすることは大切なことである。本時や本単元の目標に応じて、どのような型の文章にするかは試行錯誤が必要になると思われる。さらに、「私は・・・と考えます。そのわけは、・・・。」との口頭発表、この後に続く他児の発表を聞く機会がどの授業でも見られることであるから、これを記述指導に結びつけることはできるはずである。また、主体的、対話的で深い授業を目指す際には、授業中に自分の思いや考えをプリント等に

書く機会が工夫して数多く設定されるが、これと授業の終盤に学習して分かったことや考えたことを繋げ筋道立てて文章に書く活動を日頃から十分経験させることは、相手によく伝わる意見文を書く基盤となると考える。

さらに、構成メモづくりの大切さが挙げられる。先に述べたように、メモづくりの基本は、先ず型に沿って書き表したいことを語句で表すことができること、次にこのメモを加除、修正しながら構成メモに仕上げることである。800字程度の小論文では、練られた構成メモが小論文の評価に結びつくことが多い。小学校では、タブレット端末を活用した構成メモづくりの体験は遊び感覚でできるので、課題を工夫して取り組んでいる事例が散見される。講座では、構成メモづくりに慣れてくると、次第にその多くが念頭でできるようになってきているので、5・6年生でもこれが可能と思われる。

最後に、書き上げた文章を共有することについてであるが、大学では授業課題レポートをオンライン授業用ネットワークに載せるなどして互いに読み合う機会をつくり、より考察の幅を広げることができるようになってきている。小学校では、互いの書いた文章を読み合い、目的や意図に応じた文章の構成や展開になっているかなどについて、具体的に感想や意見を述べ合うことを大切にするとよい。自分の文章の良いところを見付け、また、互いの文章の良いところを見付けて伝え合うことを通して、自分の表現に生かそうとすることに留意して指導することが求められている。

以上、大学での小論文及び授業課題レポートの書き方指導の経験から、小学校での意見文を書く力の要諦について考察したが、このことに係って小学校教員の指導スキルを高めるためには、指導の手引き化が求められる。学校教育においては、課題教育の取り組みを進める場合に、先導的な実践の成果をまとめた指導の手引きが作成され提供されることで、これまで一定の成果を上げてきている。子どもたちが論理的な文章を書く力を身に付ける過程で、思考力・判断力を高めながら深い学びの経験を積むことにつながるものであるから、意見文等論理的な文章を書く力を育てる場合にも、これと同様な取り組みが求められていると考える。

4. まとめ

小学校から高等学校においては、子どもたちが論理的な文章を書く力を高めることができるよう教育課程に位置付けられて指導されているが、大学生の実態を見ると力量に個人差が大きく表れている。大学において自らの専門性を高めるための学習を積み研究を深めるためには、論理的な思考力と表現力は必須である。

中央教育審議会答申（令和3年1月）¹⁸⁾では、大学入学までに論理的な文章を書く経験を十分積むことが求められているが、その基礎的・基本的な経験を初等教育段階において、さらに意図的・計画的に児童ひとり一人に供されるべきである。

そのための方策を芦屋大学における指導実践から考察してきたが、今後小学校における指導と結び、研究実践の中から具体的な指導方略を明らかにする必要があると考える。

[参考文献]

- 1) 長谷川祥子：小学校国語科 論理的文章を書く力を育てる書き方指導－論理的思考力・表現力を身に付ける小論文指導－，明治図書出版，pp 16-35，2017.
- 2) 光野公司郎・篠原京子：小学校国語科における「書くこと」指導の研究，共栄大学教育学部研究紀要(1)，pp 1-25，2017.
- 3) 沼田拓弥：小学校児童の意見文作成における意見文作成における一考察－相互推敲，二百字限定作文を手だてとして－，<https://www.semanticscholar.org/paper>，pp 251-254，2015.
- 4) 佐藤和紀ほか：小学校高学年児童の意見文作成におけるクラウドサービスによる相互参照の効果，日本教育工学会論文誌，https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/advpub/0/advpub_S45061/_pdf，2021.
- 5) 吉田和樹：思考ツールを生かして文章を書く力を育てる中学校国語科の授業，群馬大学教育実践研究第 37 号，pp 267-276，2020.
- 6) 清道亜都子：高校生の意見文作成指導における「型」の効果，教育心理学研究，第 58 巻 3 号，pp 361-371，2010.
- 7) 畑山聡：小論文に関する一考察，東北女子大学・東北女子短期大学紀要，No.53，pp 137-144，2014.
- 8) 篠崎祐介：アクティブ・ラーニングによる文章表現指導の研究，リメディアル教育研究，第 10 巻第 2 号，pp 42-52，2015.
- 9) 工藤俊郎ほか：1 年次前期の作文指導の効果，リメディアル教育研究第 5 巻第 2 号，pp 73-80，2010.
- 10) 佐渡島紗織ほか：因子分析による学術的文章作成力の構造解析，リメディアル教育研究，第 11 巻第 2 号，pp 39-48，2016.
- 11) 沖山吉和：教育論作文，一ツ橋書店，2019.
- 12) 岸上隆文ほか：教育採用試験パーフェクトガイド 小論文編，学芸みらい社，2018.
- 13) 松永努：手取り足取り，特訓道場 合格する論作文，時事通信出版局，2019.
- 14) 資格試験研究会：教員採用試験 差がつく論文の書き方，実務教育出版，2019.
- 15) 増田泉：基本となる文章構成に着目した論理的文章の書き方指導－小学校から大学までの小論文指導の方策－，新島学園短期大学紀要第 40 号，pp 37-50，2019.
- 16) 文部科学省：小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説国語編，https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_kyoiku_01-100002607_002.pdf，pp 76-152，2016.
- 17) 笠原清次ほか：大学の特徴を生かした教員への就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－，芦屋大学論叢第 71 号，pp 21，2019.
- 18) 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～ (答申)，pp 39-40，2021.